HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	建築家・田上義也の建築教育活動について ： 大学所管資料を通じて
著者	須田，邦昭
引用	北海学園大学工学部研究報告，34：39-48
発行日	2007-02-20

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

建築家・田上義也の建築教育活動について—大学所管資料を通じて—

須　田　邦　昭*

On Activities of University Education of Yoshiya Tanoue, Architect — from Material within Hokkai-Gakuen University —

Kuniaki SUDA*

要　旨

田上義也は北海道における民間個人建築家の草分け的存在である．北海道における建築設計や建築家の歩みを近現代建築史上に位置づける場合，田上の存在は要点であり，その圧倒的な活動と個々の建築作品に関する研究も豊富である．

田上の多様な活動の一面として，本学建築学科開設の早期において専任教員として建築教育に関わった点もあげられる．本稿では，本工学部に残る資料をもとに，教員就任の経緯，在職期間，担当科目をめぐって考察し，加えて，この時期が田上の建築活動の隆盛期と重なっていたことを指摘する．

1　はじめに

田上義也は，北海道を拠点にして設計活動を行った民間建築家の草分け的存在といえる（ここでの民間建築家とは民間の個人の立場で建築設計事務所を主宰する建築家をさす）．来道（大正12年）以来，逝去（平成13年）に至るおよそ68年間における建築活動，社会活動，ならびに業積評価については，角幸博，越野武らが「田上義也の初期作品について」「建築家・田上義也の戦後の建築活動」ほか一連の論文（以後，角・越野論文という）で明らかにしている[1)]．

これらの論文における田上の建築教育活動に関する記載は，社会活動の範疇で北海学園大学工学部教授であったことと，その在職期間をあげるに留まる[2)]．

しかし田上が専任教授を務めた時期が，同大学工学部建築学科の創設期そのものであったことは少なからず強調されてよいであろう．なぜなら同学科が本道の４年制私大としては最初の

* 北海学園大学工学部建築学科
* Department of Architecture and Building Engineering, Faculty of Engineering, Hokkai-Gakuen University

建築学科であり，したがって田上は，民間建築家が本道の4年制私大の建築教育に専任教員として関わった最初のケースにあたるからである．

本稿の目的は，この北海学園大学における田上の建築教育の足跡を概観し，建築家田上義也研究に多少とも寄与しようとすることにある．

2 教員就任の経緯

1）学科創設趣旨との関係

当時の建築学科創設趣旨に，北海道総合開発の一環として雪と寒さに代表される北方圏的な環境条件に対応する建築技術者の養成の必要性が謳われている[3]．したがって教員選考においては，この学科設立趣旨を文部省（現文科省）や社会に向けて明快にアピールできるような目玉となる教員を求めていた筈である．その1人が田上であったのは確かであろう．

当時の新学部開設専門委員会の中心メンバーであり初代工学部長となった伊福部宗夫が，当時の学報の「工学部の現在と未来」と題するインタビューで，田上の教員招聘について「ジャーナリズムに多くの論説を発表なさっておられますので，ご存知でしょうが，やはり北海道建築デザインでは第一人者と申してよいでしょう.」と述べている[4]．

その「ジャーナリズムにおける多くの論説」とは，角・越野論文が明らかにした活動経歴を参照するなら，特に一般市民の目にふれる54回に及ぶ連載「北海道の建築」(読売新聞,1959年）や，「創生川」(北海タイムス,1962年～64年）などを念頭においたものと思われる．また「北海道建築デザインでは第一人者」とは，北海道の建築のあり方に対する田上独自の「雪国的造形」論などの論説とその実践である建築作品の豊富さにおいて，同建築学科の創設趣旨に相応しい適任者であるとの意味であろう[5]．ちなみに田上は，学科開設の3年前に，昭和40年度北海道文化賞を受賞している[7]．建築分野からは初めての受賞であった．

2）就任形態

田上は専任教員であったが，学内での身分は準専任教員扱いとされた[6]．このため研究室は与えられたが担当科目の授業のみを行い，学内の運営に関わる業務は免除された．したがって出勤時間は授業のために要する範囲でよく，また給与は非常勤講師給に準じるものであった．このような身分で教育に関わった理由は不明だがふたつの点が推測される．ひとつは，田上が当時すでに70歳に近い高齢であったことにあるのではないか．この理由は必ずしも大学教員の停年制度と関係するものではなかったと思われる．当時同大学には目安となる停年年齢はあったといえるが，今日のような明確な制度ではなかった．むしろ田上自身，日常の負担軽減を望んだためではないかと推測される．いまひとつは，これと関連するが，教員業務と並行してこれまでどおり設計事務所の業務を本業とすることである．おそらく，この点が絶対的な条件で

あったと推測される．付け加えるなら，これらの理由によって，専任教員としての協力期間についても学科設置後完成年度を越える程度の在職年数を目処にして承諾したのではないかと思われる（「3.教育に関わった期間」においてふれる）．

田上は，準専任教員という変則的な身分での就任となったため，学内行政には一切関わることはなかったが，当時の教員の伝聞では，年度の初めと終わりの学科会議には出席したようである．

3　教育に関わった期間

1）着任時期

新学科開設の場合，教員の着任時期は，教授会構成の意味においても開設年度までに集中するのが一般的であろう．同建築学科の開設年度は,1968年度（昭和43年度）である．

一方，角・越野論文では，田上が同建築学科に関わった期間を，北海学園大学工学部教授「1969年～1973年（昭和44年～昭和48年．ただし邦暦は筆者加筆)」と記している[8]．これによってその初年の「1969年」を着任年とみなしやすいが，事実はそうではない．

新学科設置認可に必要な申請書類の中に，採用予定教員から学長に宛てた承諾書がある[9]．田上の承諾書（昭和42年11月15日付）では，「昭和43年４月に就任する」となっている．このとおり着任したかどうかをさらに確認するために，当時の人事関連の諸資料[10]に当たってみたが，どの資料も開設年度に採用となっている．また同窓会名簿[11]では，在任は開設年度と同じ1968年（昭和43年）から，と記している（ただし着任月は記されていない）．

着任年は，角・越野論文の「1969年～1973年」の「1969年（昭和44年)」より１年早い年，すなわち開設年度の1968年であることは確かである．

角・越野論文は田上側の認識に基づく記録等を踏まえている．もし仮に田上自身が「1969年～1973年」を在任期間と思っていたのであれば，田上がそのように誤解する理由は考えられる．その理由は，田上の担当科目が開講されたのが着任１年後であったことにあると思われる．準専任教員の場合，先述のとおり，担当科目以外での業務や出勤を求められなかったから，実質的な出勤がなかった1968年度よりも，実際上の教育活動が始まった「1969年度」を着任年度とする認識が，田上自身にあったとしてもおかしくないからである．

2）職名について

先述のとおり，角・越野論文では，北海学園大学工学部教授「1969年～1973年」としている．これが在任期間ではなく文字通り教授であった期間を指すのであれば，事実といえよう．ただし，これに対しては多少の補足もできる．

田上は，同工学部内の関係書類によれば着任年度（開設年度の1968年度）は講師である[12]．

その後いつ教授に昇格したかについては，必ずしも明確ではない．

つまり，同時期に在職した他の教員のその後の昇格に関しては教授会での手続書類が存在するのに，田上の昇格に関する同種書類は見出せないのである．順専任扱いであったために，昇格手続きも別途進められた可能性はある．

学生向けに講義概要等を記した「工学部学生便覧」でも教員の職名を知ることができる．最初の「工学部学生便覧」は第１期学生が３学年次（専門課程）となる1970年度（昭和45年度）に発行された．それには教授とあるから，少なくても1970年以降，退任年度まで教授であった．しかし残る1969年度（着任の翌年度）の職名を確認することはできない．

ところで，教授・助教授の資格審査においては，大学卒業後の経過年数，相当する業績があること，および教育に関する経験・識見を有することが要件とされる[13]．このため研究業績や専攻分野で特に秀でた知識・経験が認められるとしても，この教育経験（経歴）を有していないために講師で採用後１年間の教育経験を経た後に改めて教授資格を審査することも行われる．

他の教員については，当時の教授会議事録にそのような昇格記録がある．田上の場合もこの教育経験の欠如に該当したと考えられるから，着任１年目は講師として教育経験を経て，その翌年度の1969年度から教授になったという見方も可能であろう。

３）退職時期

準専任であったためか，大学内の手続書類からは退職時期を記した資料を見出せなかった．しかし「工学部学生便覧」と同窓会名簿でも確かめることができる.「工学部学生便覧」では，1970年度（昭和45年度）用から1972年度（昭和47年度）用までのものには専任教授，また翌1973年度（昭和48年度）用からは非常勤講師と記されている．同窓会名簿[14]では，1972年（昭和47年）まで在職とある（退任月は記されていない）．なお，同窓会名簿の「1972年まで在職」については，担当科目（「4.担当科目について」でふれる）の開講時期との関係で年度途中での退職は考えにくいから，1972年12月以前の意味ではなく，1972年度の意味で1973年３月まで在職したとすれば「工学部学生便覧」の記載と異ならない．

これに関連して，角・越野論文が記す北海学園大学工学部教授「1969年～1973年」では，「1973年」の12月まで在職したと解釈される恐れもある．

以上を総合すれば，厳密には1968年４月に着任し1973年３月に退職したのである．開設年度から５ヶ年度在職し，実際上の活動期間としては少なくても４ヶ年度にわたって建築教育に関わったのである．授業では４期までの学生と関わり，また２期までの卒業生を送り出したことになる．

このように，田上は同建築学科の創設期という重要な段階における教育に貢献したということができる．田上は1899年（明治32年５月）生まれであるから，当時の年齢は着任時で68歳

（1968年４月時），退職時で73歳であった．

４）非常勤講師としての期間

田上は専任教授を退職した後，直ちに同大学の建築教育から離れたのではない.「工学部学生便覧」によると，1973年度（昭和48年度）用から1980年度（昭和55年度）用までの非常勤講師欄に名前が掲載されている．

専任教授を退任してからも８年間という比較的長い間，同大学の建築教育に携わっていたのである．田上の非常勤講師期間の年齢は，73歳から81歳に及んでおり，実に高齢であった．

なお角・越野論文は，退任後，引き続き一定期間非常勤勤講師として教育に関わっていた点には言及していない．

４　担当科目について

専任教員時代に担当した科目は，２年次通年開講の「建築史（必修）」，３年次半年開講の「建築デザイン論（選択）」の２講義科目[15]と「卒業研究[16]」である．建築家が大学教育で担当する科目としては，設計指導が一般的であろう．この点，担当科目が講義中心であるのは特殊な例になるかもしれない．設計指導は長時間束縛され負担も大きい授業科目である。田上が設計指導を担当しなかった理由も「2.教員就任の経緯」の章で推察した準専任扱いの理由と同様であろう．

今一度，田上の授業担当の全体的状況を見るなら，まず，２年次の学生に対して，通常は建築史研究者が行う「建築史」の講義を通年で担当し，翌年にはこの負担の上に「建築デザイン論」が半年開講で加わる．半年間は１週に「建築史」と「建築デザイン論」の２つの講義が行われたことになる．さらに翌々年はこれらに「卒業研究」が加わっている．在職期間の後半の２年間はこの状態であったから，年齢を考慮すると，かなりの負担であったことが想像される．

その後の非常勤講師時代においては，「建築デザイン論」を引き続き担当し，加えて「卒業研究」を学外協力者のかたちで１年度のみ担当している．もう一方の科目「建築史」については，他の非常勤講師に担当が替わった．

以上の科目担当の状況から，田上は専任教員を退いてからもなお大学教育に協力的であったといえる．

なお，田上が非常勤講師を辞めた後の「建築デザイン論」の扱いに関しては，どの年度の「工学部学生便覧」にも「当分の間，開講しない」と記されており，その後新しいカリキュラムに改定される1988年度（昭和63年度）には，科目自体が廃止された[17]．このような「建築デザイン論」の取り扱い方の経緯からすると，同科目こそが田上の主要な授業科目であって，建

築家たる田上に限った特別講義のような位置づけにあったともいえよう．

5 授業テーマについて

「工学部学生便覧」に掲載された授業内容のテーマは以下のとおりである（表－1，表－2）．

表－1 建築史（専任教員として：1970年度～1972年度担当）

授業内容	・西洋の古代から近代に至る建築様式と史的考察 ・日本の古代から近代に至る建築様式と史的考察 ・近代における建築様式と史的考察 ・東洋の建築様式と史的考察（ただし1972年度のみ） ・北方建築の発生的考察（特に北海道建築へのアプローチ）
使用テキスト	・建築史図集：西洋・日本・近代（日本建築学会編） ・スライド　プリント（ただし1971年度から加わる）
参考図書	・建築学体系（日本建築史、西洋建築史、近代建築史） ・西洋建築史概説（森田慶一：1972年度は同著者の「西洋建築入門」に変更） ・ヨーロッパ建築史序説（N. ペブスナー） ・モダンデザインの展開（N. ペブスナー） ・空間時間建築（S. ギーディオン） ・日本建築史序説（大田博太郎）

表－2 建築デザイン（専任教員として：1970年度～1972年度，非常勤講師として1973年度～1980年度担当）

授業内容	・デザイン概論（1970年度から1974年度まで） ・デザインに関する基本的考察 ・北方圏におけるデザインの方法論
使用テキスト	・建築の設計（桜門建築研究会編：1970年のみ） ・スライド　プリント（1971年度から）
参考図書	・現代のデザイン（川添登） ・デザインとは何か（P.J. グリヨ：1971年度から加わる） ・碧きニルバーナ（竹山実：1974年度のみ）

学生便覧に掲載された授業内容が忠実に行われるとは限らない．当時は学生の授業評価が行われる今日とは異なる状況にあったので，その可能性は少なくない．それを確かめるにも大学内の資料では実際の授業原稿などにあたることができないという限界がある．他方，学生便覧に掲載された授業内容は，少なくてもどのような目標の下に授業が行われたのか，その趣旨は示唆されるであろう．

「建築史」に関しては，通常扱われる範囲に加え「北方建築の発生的考察（特に北海道建築へのアプローチ）」が掲げられているのが特徴的である．この部分は北国の建築のあり様を自然克服の史的発展として描こうとした「田上建築史」といえよう．

「建築デザイン論」に関しても，掲げられている「北方圏におけるデザインの方法論」はこ

れと同種のテーマであろう．この講義は，専任教員退任後も８年間非常勤講師として続けられた．その講義目標を推測するには，角・越野論文が明らかにした田上の最も重要な建築思想である独自の「雪国的造形」論が手がかりになるであろう．この「雪国的造形」論について，同論文は「師であるF.L. ライトの直接の影響を超えようとしたデザイン展開であり，戦後期においても常に設計活動の根本として意識され，戦後は，雪国的造形は美と技術の両面から達成されるべきものであると唱え，その造形性にいっそうの重点が置かれる.」と指摘している[18]．この講義の中心内容が「雪国的造形」論であったことは十分に考えられることである．それは創作論として建築の地域的表現性を論じようとした「田上建築論」であったといってもよいであろう．同時にそれは北方圏的な環境条件に対応する建築技術者の養成という学科の設立趣旨にも応えるものであったといえるであろう．

6　卒業研究の指導について

当時の卒業研究の名称は，「卒業論文または設計」であった．計３ヶ年度担当したが，いずれも設計ではなく論文の指導であった．そのうち最後の年度は専任教員を退職後，非常勤講師を勤めた期間に含まれるが，この期間の卒業研究は非常勤講師としての担当科目ではなく，いわば無報酬での協力であった．この点にも建築教育への情熱がうかがえる．その論文テーマを以下に示す（表－３）．

表－３　論文テーマ

年　度	テ　ー　マ	(学生数)
1971年度	・北海道における住宅の史的考察	(１名)
	・風土と建築	(１名)
	・北海道における建築の推移	(１名)
1972年度	・The Future of Architecture by F.LL.WRIGHTの訳	(１名)
	・北方圏における住宅の研究	(２名)
	・建築における史的考察「日光東照宮」	(１名)
	・日本の民家	(１名)
1975年度	・北方建築について	(１名)
	・北海道における住宅に関する考察	(２名共同)

初期卒業生の卒業論文であるので，これら論文の内容にまであたることはできない．しかしライトの著作の翻訳１点を除いては「北方・北海道」「風土」「住宅」がキーワードになっており，自身の建築思想である「雪国的造形」論の射程にあるテーマで指導していたことがうかがえる．

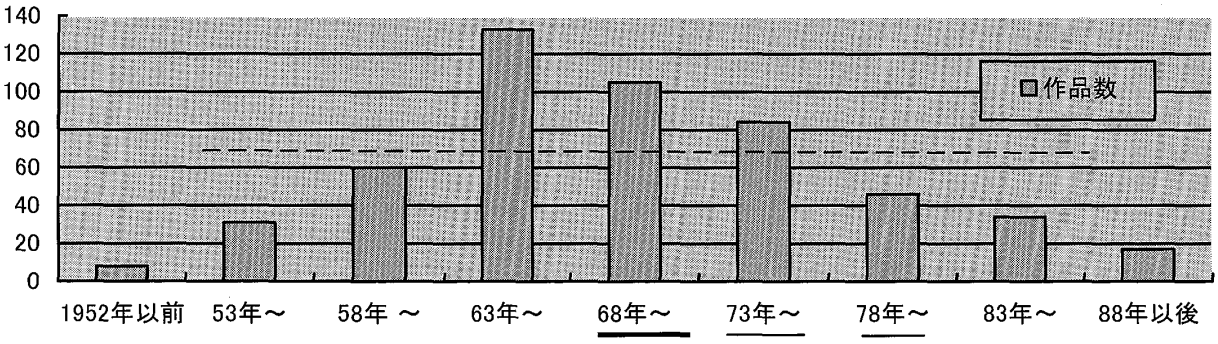
7 教員時代の建築活動

在任期間中，教育活動と並行してどの程度の建築活動を行っていたのかを知る目安のために，在任期間中の作品数とそれ以前以降の作品数の度合いを比較してみる．

専任教員として在職した1968年４月から1972年３月までが５年間に相当するので，便宜的に1968年から1972年までの５年間とその前後の５年間ごとの建築作品数を比較する．もちろん活動の度合いには作品数ばかりでなく作品の規模や種類などが関係してくるが，ここではあくまでも作品数に限っての比較である.5年ごとの建築作品数は角・越野論文の「田上義也の戦後活動表[20]」を利用して集計する．ただし作品数は，同活動表における非住宅作品と住宅作品の数の合計である（図－１）．また角・越野論文の同活動表にある作品年とは，おそらく竣工年を指すであろう．したがって各作品の設計時期は１，２年前にさかのぼることもありうる．しかし工事期間における設計管理業務を考慮するなら，各作品別に要する活動期間に含めてもそれほどのずれはないであろう．

図－１で建築作品数が相対的に多い５年区間をみてみる．まず，1953年から1987年の35年間について５年間ごとの作品数を平均すると，約70作品となる．各５年区間の中で平均作品数の70作品を越える作品数となる区間は，1963年，1968年，1977年からの各５年間で計15年間である．この15年間の中で最も多いのは在職前1963年からの５年間であり，次いで専任教員として在職した1968年からの５年間，その後非常勤講師を勤めた期間の前半部にあたる1973年からの５年間の順である．

同活動表に併記されている主な社会的活動欄をみると，それら活動も1963年から1973年に集中している．



図－１　専任教員期間５年間を単位とした建築作品数の推移
年次のアンダーライン：━━━　専任教員時代　──　非常勤講師時代（1980年度まで）
グラフ中の　━━━：1953年から1987年の間の５年間ごとの作品数の平均，約70件
（角・越野ら論文中の表－１田上義也の戦後活動表より作成）

田上の設計事務所による作品数は，戦後活動の全般を通してみても，決して少なくはない．その中でも最も多くの建築設計を手がけた，いわば隆盛期の中期から後期に大学に在職または

非常勤講師として関わっていたことになる．年齢でいうなら，68歳から81歳までである（ただし非常勤講師の期間を含める）．それだけに，田上の活動の旺盛さは著しいといえる．

8　終わりに

田上は，専任教員としては1968年度（同年４月から）から1972年度（同年３月まで）の５年間，その後の非常勤講師を勤めた８年間を含めると，1980年度（1981年３月）までの13年間，北海学園大学工学部建築学科の教育に関わっていた．満年齢では実に68歳から81歳までの高齢時にあたる．ただし，授業は専任教員着任の１年後から担当しているから，実質的に教育に関わった期間（非常勤講師期間を含む）は１年少ない12年間であった．

授業科目に関しては，建築家が教員なら通常は担当する設計指導を担当せず，講義の「建築史」と「建築デザイン論」を担当した．このうち主要な授業科目は「建築デザイン論」であった．それは田上の建築思想である「雪国的造形」論に基く内容を含んでおり、いわば「田上建築論」とでもいうべき特別講義のような性格の科目であった．また「卒業研究」の指導にもあたっている．それらにも，「雪国的造形」論を背景としたと思われるテーマが含まれていた．したがって田上の授業は，北方圏的な環境条件に対応する建築技術者の養成という学科の設立趣旨に十分応えるものとなったであろう．

田上の建築教育に関する意義は，本道の４年生私大に最初に設置された建築学科に専任教員として貢献した初の民間建築家であった点にある．それは本道の大学に限るなら，先駆的な例であったといってよいであろう．またこれらの期間は戦後の田上の設計活動における隆盛期の中後期にあたっており，田上の建築に関する諸活動の旺盛さが明らかになった．

注

1）いずれも日本建築学会大会学術講演梗概集（前者1985年，後者は1999年）．同学会北海道支部研究報告でこれに対応する詳細な論文ほか，一連の論文を多数発表している．

2）前掲書，角幸博，越野武「建築家田上義也（1899～1991）の戦後の建築活動」日本建築学会大会学術講演梗概集，1999年，pp.353－354.

3）北海学園創基百周年記念事業出版専門委員会編「北海学園大学三十五年小史」学校法人北海学園，1986，pp.46－47.

4）同前，p.293.

5）前掲書「建築家田上義也（1899～1991）の戦後の建築活動」

6）北海学園大学工学部事務保管ファイル「人事・昭和44年８月～昭和48年４月」の「工学部教員一覧表」(昭和44年11月５月付）の採用年次計画の氏名欄に教授・準専任とある．同ファイルの「採用年次計画表」(昭和44年11月）には教授とあり，その備考欄に「ただし,給与は非常勤扱い」とある．

7）同賞受賞記念に北方文化研究会編「田上義也建築作品抄」(らいらっく書房，1966年）が刊行された．収録されている受賞祝賀会等の祝辞には道の著名な政財界人や文化人の名前がみられ，田上の知名度，活動の

広さを想像させる.

8）前掲書「建築家田上義也（1899～1991）の戦後の建築活動」

9）北海学園大学工学部事務保管ファイル「学長及び教員個人調書」(昭和42年11月付). 新学科設置には文部省へ申請書類として採用予定教員から学長に宛てた専任教員就任に同意した承諾書が必要.

10）北海学園大学工学部事務保管ファイル「学長並びに学部及び学科別担当教員予定表」(昭和42年11月付), 前掲書「人事（昭和44年８月～昭和48年４月)」にある工学部教員一覧表並びに同教員採用履行状況報告書（昭和44年10月付）および同教員採用年次計画表（昭和44年11月), 等による.

11）名簿調整委員会編「豊平会名簿1986」北海学園大学同窓会, p24, 旧教職員欄.

12）前掲書「学長並びに学部及び学科別担当教員予定表」には, 講師として申請（備考欄）とある. 前掲書「人事（昭和44年８月～昭和48年４月)」の同教員採用履行状況報告書（昭和44年10月付）にも講師とある.

13）北海学園大学「教員選考基準」昭和37年（1962年）２月26日施行. 同「推薦基準」昭和38年（1963年）12月１日施行.

14）前掲書「豊平会名簿1986」p24.

15）前掲書「北海学園大学三十五年小史」p.290.「工学部学生便覧」昭和45年度～昭和55年度版（1970年度～1980年度版).

16）建築学科内部資料「卒業設計・卒業論文テーマ一覧」昭和46, 47, 50年度分（1971, 1972, 1975年度分).

17）「工学部学生便覧」昭和56年度～昭和62, 63年度版（1981年度～1987, 1988年度版).

18）石井智樹, 越野武, 角博幸「建築家・田上義也の戦後の建築活動」日本建築学会北海道支部研究報告集No.72, 1999年, pp.573－576.

19）前掲書「建築家田上義也（1899～1991）の戦後の建築活動」表－１, 西暦年別に活動の詳細を明らかにしており労作である.